

宇宙に挑む 兵庫の企業力

人類にとって「最後のフロンティア(未開拓地)」とされる宇宙との距離が、平成時代にはぐっと縮まった。太陽系や生命の起源に迫るため探査機が打ち上げられ、日本独自の測位衛星も本格運用が始まった。次の時代、宇宙利用はさらに加速する。その最先端を走る企業が兵庫県にある。(田中陽一、段 貴則)



岸本信弘社長

「みちびき」で精度を上げる自動運転のイメージ。衛星みちびき GPS衛星。補完。GPS衛星 補完。トラクター。受信機で位置を計測しながら自動運転。

尼崎×衛星信号の受信機開発 無人トラクター―運転実験

広い農場をトラクターが悠々と進む。端まで到達する方向転換。動きはスムーズだが、運転席に人の姿はない。昨秋、4基の本格運用が始まった準天頂衛星「みちびき」などから信号を受け取り、自

らの位置を計測しながら走る無人トラクターの実験風景だ。技術の肝は「誤差数センチ」という世界屈指の高精度で位置を割り出す受信機。社員25人の尼崎市のメーカー「マセラシシステムズジャパン」が、2015年から2年がかりで完成させた。

が、条件によっては5〜10センチの誤差があった。それを数センチまで縮めたのは、創業以来積み重ねてきた知見と経験だ。岸本社長はポスト平成を「自動運転時代の幕開け」とみる。高精度の位置測位は、小型無人機ドローンを活用した宅配や車いすの自動運転、高刻な農業分野に限らない。既国内外の100社以上から注文が入り、受信機を搭載したトラクターは量産段階に入った。

みる。高精度の位置測位は、小型無人機ドローンを活用した宅配や車いすの自動運転、高刻な農業分野に限らない。既国内外の100社以上から注文が入り、受信機を搭載したトラクターは量産段階に入った。岸本社長はポスト平成を「自動運転時代の幕開け」とみる。高精度の位置測位は、小型無人機ドローンを活用した宅配や車いすの自動運転、高刻な農業分野に限らない。既国内外の100社以上から注文が入り、受信機を搭載したトラクターは量産段階に入った。岸本社長はポスト平成を「自動運転時代の幕開け」とみる。高精度の位置測位は、小型無人機ドローンを活用した宅配や車いすの自動運転、高刻な農業分野に限らない。既国内外の100社以上から注文が入り、受信機を搭載したトラクターは量産段階に入った。